

口絵解説：徳島県阿南市産大理石の 歴史的な重要建造物における使用例

地質班（地学団体研究会）

石田 啓祐^{1*} 早瀬 隆人² 中尾 賢一³ 東明 省三⁴

要旨：筆者らは2000年以降、徳島県産大理石の採掘に関する現地調査と聞き取り調査、ならびに歴史的建造物における使用例の調査を進めてきた。その結果、東京では、国会議事堂、国立博物館本館、文化庁（文部科学省旧館）、大阪では、大阪倶楽部、新井ビル（旧報徳銀行大阪支店）の建物に使用されていることを確認した。また、大阪市中央公会堂に関しては、増改築の際に使用された記録はあるが、近年の修復に伴って撤去されていることを確認した。本稿では、口絵に示す阿南市産大理石の使用例を解説した。

キーワード：大理石、歴史的建造物、登録文化財、国会議事堂、東京国立博物館

1. はじめに

国会議事堂（東京都千代田区永田町）は、1920（大正9）年に起工され、1936（昭和11）年に落成している。議事堂は、別名「大理石の博物館」ともいわれるように、内装には、全国の主立った大理石約50銘柄を使用していることが、大蔵省営繕局管財局、（1936、1938）の資料に記録されている。徳島県産大理石が国会議事堂に使用されていることは同資料にも記録され、議事堂の参観者には、御休所前広間では「ここに使用された大理石は、徳島県（阿南市）から切り出されたものです。」と紹介されている。石田ほか（2004、2007、2009）は、「議事堂の石」（工藤ほか、1999）の著者である工藤晃元衆議院議員らの照会に応じて、2000年以降に国会議事堂に使用された徳島県産大理石石材の産地を特定し、衆参両院の協力の下に、石材見本と議事堂石材ならびに、請負元であった矢橋大理石（岐阜県大垣市）に保管されている加工石材見本の照合を行った。また、議事堂大理石の採掘や研磨加工に携わった関係者を中心に、聞き取り調査とデータの検証を進め

た。その結果、徳島県からは、全国で最も多い7銘柄が使用され、議事堂の主立った箇所に最も多く使用されていることが確認できた。中でも、阿南市からは「淡雪」「新淡雪」「加茂更紗」「時鳥」「答島」の5銘柄が、那賀町（旧木沢村）からは「曙」「木頭石」の2銘柄が使用されている（口絵図1）。

その後、石田（2012）は東京国立博物館本館の階段周りに「時鳥」が使用されていることを、石材の特徴と博物館の建築資料で確認した。また、早瀬は文化庁来訪の折、文部科学省旧館に「時鳥」が使用されている可能性を見だし、2013年3月には、石田とともに両館において、詳細な石材の照合を行った。2010年以降には、世界遺産を目指した四国八十八箇所霊場と遍路道の調査の一環として、第21番札所太龍寺の礎石に使用された大理石採掘地の特定と、県内における大理石採掘の起源を探る調査を開始した（石田、2013）。

県内では、以上に加えて、つるぎ町一宇の「ろう石」が、議事堂大理石選定の候補として調査され、分析されている（小山、1931；石田ほか、2011）。これらの石材は、いずれも日本の代表的近代建造物

1 徳島大学大学院SAS研究部 2 徳島県教育文化政策課 3 徳島県立博物館 4 阿南市文化財保護審議会

* 770-8502 徳島市南常三島町1-1 ishidak@tokushima-u.ac.jp

の装飾石材として使用され、採掘地が判明しており、当時の状況が伺える状態にあり、歴史・文化を理解する上で重要であることから、本報告書にその概要を紹介する。

2. 使用例と口絵解説

(1) 21番札所太龍寺礎石の大理石採掘跡

四国八十八箇所霊場21番札所太龍寺（徳島県阿南市加茂町龍山2）の主な建造物である多宝塔、大師堂、御廟の礎石とそれらを結ぶ通路の石段には、多量の大理石が用いられている（口絵写真1, 2）。現存する多宝塔は文久元（1861）年、大師堂は明治11（1878）年の建立である。また相輪櫓は文化13（1816）年に蜂須賀家により多宝塔前に建てられたものを三重宝塔跡の礎石上に移築したものである（口絵写真1）。太龍寺の礎石に使用された大理石は、太龍寺東南尾根道の岩体から採掘され、いわや道沿いに運ばれた。採掘跡には加工途中の礎石用石材が残されていた（口絵写真3）。面取り成形の途中で、天面の中央には楔跡が刻まれている。縦100cm、横90cm、厚さ60cm程度であり、大きさ、石質とも使用石材と一致する。採掘跡では、岩体に自然に生じた節理（等間隔の規則的な割れ目）に沿って、効率的に切り出している様子が伺える（石田、2013）。これらの採掘と使用例は、四国東部仁生谷地域における大理石石材の採掘が明治期を超え、江戸期にまで遡ることを示す注目すべきことである。

(2) 東京国立博物館本館

国立博物館の本館（東京都台東区上野公園）は、当初、帝室博物館としてJ. コンドルの設計で、1881（明治14年）に竣工し、翌明治15年に開館した。1923（大正12）年の関東大震災で被災したのち、現在の建物は、1931（昭和6）年に編成された臨時帝室博物館造営課により計画され、1938（昭和13）年開館したものであり、国の重要文化財に指定されている（東京国立博物館監修、1991）。国会議事堂と同様のコンセプトで、デザインは一般公募された。渡辺仁の設計による。帝冠様式で知られる正面階段ホール壁面と手すりには、再建修復の際に、国会議事堂と同じ「時鳥」（阿南市阿瀬比産）が使用された（口絵写真4）。議事堂と同時期の建築であり、「国産化」建築の極みとされている（博物館建築研究会編、2007）。博物館の建築資料には、「一階広間、巾木及

壁大理石（徳島県阿南市産）」と明記されている。

(3) 国会議事堂

議事堂（東京都千代田区永田町）には、徳島県産の大理石が多種大量に用いられている。調査の結果、衆参両院は鏡に映したように対称的に作られており、石材も同様に使用されている。徳島県産の大理石のうち、阿南市産の4銘柄の産地と使用場所は以下である（石田ほか、2004、2007、2009）。

「時鳥」：阿南市阿瀬比町垂里田産、御休所前広間と入口の額縁（口絵写真5）、中央階段左右の壁、中央広間3階の欄干など。

「淡雪」：阿南市加茂町黒河産、御休所前広間の幅木（口絵写真5, 6）、2階中庭周りおよび通路の幅木、中央広間の柱の台座など。

「加茂更紗」：阿南市桑野町大地産、中央玄関内側の壁（口絵写真7）、議員控室入口の額縁、2階通路の窓棧など。

「新淡雪」：阿南市宝田町井関産、中央広間床のモザイク、参議院3階中庭周り通路の幅木の一部など（口絵写真8）。

「答鳥」：阿南市津乃峰町東分産（口絵写真9）、衆参両院傍聴人控室入口、傍聴人階段（通称、記者階段）、2階議員控室および1階中央部食堂のヒーター床板など。

以上の他には、

「曙」：那賀町（旧木沢村）坂州高山平産、衆参両院の第二議員階段手すりと壁。

「木頭石」：那賀町（旧木沢村）木頭みさご山産、衆参両院副議長応接室の暖炉。

(4) 大阪市立中央公会堂

旧中之島公会堂として知られる本建築は、1911（明治44）年に建築計画が持ち上がり、1913（大正13）年に着工、1918（大正7）年に完成した。日本の近代建築史上重要な建造物として、2002年に国の重要文化財に指定された。老朽化に伴い、1999年から2002年まで、指定に先立って保存修復工事が行われた際、耐震補強、免震構造が導入されたが、同時にバリアフリー化に際して、1階ホールは傾斜床構造から、建築当初の平面床に修復された（大阪市教育委員会、2003）。その際、傾斜床構造の入口段差に付け加えられていた大理石製階段の「茶龍紋（時鳥）」（阿南市阿瀬比産）は、撤去された経緯が聞き取り調査と現地確認で明らかとなった。公会堂の内

装には、岐阜県大垣市赤坂（矢橋大理石の所在地）産の大理石「シカマイア石灰岩」（古生代末の大型二枚貝化石 *Shikamaia* が密集する熱帯浅海域起源の大理石）が、同じく赤坂産の「美濃更紗」（洞穴堆積物の赤や黒の多色石灰角礫岩）で額縁風に縁取られて多用されている。「シカマイア石灰岩」は岐阜市内にある岐阜県総合庁舎（旧岐阜県庁）の建物に多用されていることで知られる。

(5) 大阪倶楽部

大阪倶楽部（中央区今橋4丁目）の建物は1924（大正13）年建築の地上4階地下1階の鉄筋コンクリート造で、安井武雄の設計による。1997年に国の登録有形文化財に指定されている。外装はレンガ張り、内装には各所に大理石が使用されており、玄関ホールの床には、徳島県阿南市桑野産の「加茂更紗」を基調に、岐阜県大垣市赤坂産の「遠眼鏡」（紡錘虫 *Yabeina* を含む黒色の石灰岩）を市松模様に組み合わせ使用している。阿南市桑野産の「加茂更紗」は、内装に多用されており、玄関ホールの噴水、2階ビリヤード室の装飾壁面（口絵写真10）、3階の暖炉床および階段幅木に見ることができる。

(6) 新井ビル（旧報徳銀行大阪支店）

新井ビル（大阪市中央区今橋2丁目）は、河合浩蔵の設計により1922（大正11）年に建築された。鉄筋コンクリート4階建である。外装はスクラッチタイル貼で、1階の内壁に「加茂更紗」が使用されている。「加茂更紗」（徳島県阿南市桑野産）の周囲を、「美濃更紗」（岐阜県大垣市赤坂産）で額縁にした使い方（口絵写真11）であり、大阪市中央公会堂の内装と同様のコンセプトが認められる。1997年に国の登録有形文化財に指定されている。

(7) 文化庁（旧文部省庁舎）

旧文部省庁舎（現文化庁：東京都千代田区霞が関3丁目）は、1932（昭和7）年建設、鉄骨鉄筋コンクリート増6階建塔屋付きで、外装はスクラッチタイル貼である。国の有形文化財として2007（平成19）年に登録された。エレベーターホールと階段の壁面は建築当初の状態まで今日に至っており、2階から6階のエレベーター入口周囲の壁面には徳島県阿南市阿瀬比産の「時鳥」が使用されている（口絵写真12・13）。階段の手すりには岐阜県大垣市産の「遠眼鏡」（ヤベイナ石灰岩）が使用されている。

3. まとめにかえて

これまでの調査から見てきたことは、上記において紹介した大正末期から昭和初期の近代建造物では、東京においても大阪でも、徳島県阿南市産の大理石と岐阜県大垣市赤坂金山産の大理石のいずれかあるいは両方が同時に用いられていることである。その理由として、矢橋大理石（岐阜県大垣市赤坂町、明治34年、矢橋亮吉創業）は当時、大理石の生産量全国一（累積4億t）であり、自社の金山産のみならず、全国の大大理石加工の元請けとして躍進していた。徳島県産の国会議事堂大理石7銘柄についても、矢橋大理石による買付けで、陸揚げ後は、東海道線で関ヶ原を経て赤坂の工場へ運ばれ、注文に応じて加工された後に、東京へと出荷されていた。

国家的建造物である国会議事堂、国立博物館、旧文部省などの建築に関しては、当時の営繕官僚であり、建築家であった矢橋賢吉（1869（明治2）—1927（昭和2））の功績が大きい。矢橋賢吉は、岐阜県大垣市赤坂町出身で、地元矢橋大理石の創業者である矢橋亮吉の親族でもあった。

営繕官僚となった賢吉は、1908（明治41）年に国命で欧米出張し、帰国後に「各国議院建築調査復命書」を国に提出している。1913（大正2）年には、大臣官房営繕課長臨時建築課に配属、その後、1917（大正6）年からは議事堂議院建築調査会委員、1918（大正7）年には大蔵省臨時議院建築局工営部長となり、国会議事堂の設計公募審査員も務めている。1919（大正8）年に工学博士号を取得し、1921（大正10）年には、議事堂建築のため、臨時議院建築局工営部長として、「本邦産建築石材」を編纂している（臨時議院建築局、1921）。これは議事堂完成後に出版される議事堂関連石材を集大成した「日本産石材精義」（小山、1931）の基本資料ともなっている。議事堂の建設が佳境を迎えた1927（昭和2）年には、帝国議会議事堂本館上棟式典の役員として、無事、式を遂行した1ヶ月後に、過労が因で賢吉は急逝している。まさしく国会議事堂建築のために生涯を捧げた人物であったといえる。

当時の大理石生産量から見積もと、意外なほどに、国会議事堂をはじめ、国立博物館、旧文部省いずれにおいても、元請けであった矢橋大理石の持ち

山すなわち化石でも有名な金生山からの石材はほとんど使われていない。それは、工藤ほか（1999）でも“ナゾであり不思議”とされているように、調査してみると「遠眼鏡」などが議員食堂のカウンターなど控えめな場所に、わずかに使われていることに気づく。一方で、当時、株式で財を成した岩本栄之助氏の寄付により建築がはじまった大阪市立中央公会堂の場合は、まさに美濃赤坂産大理石のオンパレードであり、極めて華やかな印象である。赤坂産でも、とくに色合いと模様が際立った「美濃更紗」と「シカマイヤ石灰岩」がコンビネーションで使われており、議事堂の片隅に遠慮がちに使われている“利休ネズミ”色の「遠眼鏡」などといった石材は使用されていない。

徳島県産の大理石が、議事堂に多種銘柄大量に使用された詳しい経緯は今後の課題である。例えば、大理石石材の搬出港であった橋湾の答島港に最寄りの津乃峰町東分からは、議事堂で最も多く使用されている大理石のひとつである「答島」が切り出されている。議事堂建築当時、徳島県出身の衆議院議員であり、「答島」採石場の当主であった高島兵吉氏は、1932（昭和7）年の五・一五事件で暗殺された犬飼毅首相と親交が深く、高島家には多くの交流文書が保存されている。

理由の詳細は今後委ねるとして、大正末～昭和の初期に、東京、京阪神方面に向けて阿南市を中心とする加茂谷地域から、大量の大理石が答島港経由で搬出され、日本の代表的近代建築に使用され、それらの多くが国の登録文化財として現存することは重要な事実であり、まさに徳島県阿南市が全国に発信することができる「オンリーワン」であると言える（石田，2012）。しかも大理石切出しの歴史は、江戸期にまで遡り、四国八十八箇所霊場と遍路道の歴史的建造物に使用されている。江戸期以来の石材採掘跡が特定され、現存することに加えて、切出しに関わる道具、写真、文書資料などが、今日まで関係者の家々に代々伝えられ、保存されている。近年「石見銀山」が世界遺産指定になった決め手に関しても、当時世界に向けて銀を輸出していた実績が文

書資料として残され確認できた事によると伝え聞く。これらのことは、八十八箇所遍路道の世界遺産を目指した取組の上でも、重要であり、自然と歴史・文化、産業の総合的遺産として今後に向けて、よりいっそう大切に保護保存され、整理され、地域の紹介や振興に向けて多いに活用されることを祈念する次第である。

文献

- 石田啓祐，2012，大理石採掘場跡は学術・文化・歴史を語るかけがえのない遺産。阿南市企画部秘書広報課（編）：特集空海ゆかりのかも道の魅力に触れる旅，広報あなん，No.652，6。
- 石田啓祐，吉岡美穂，岡本治香，難波重理子，中尾賢一，香西武，2004，徳島県産国会議事堂大理石の研究—その1。産地と地質概要—。徳島大学自然科学研究，18，15-23。
- 石田啓祐，中尾賢一，東明省三，2007，徳島県産国会議事堂大理石の研究—その2。採掘関連聞き取り調査と検証—。徳島大学自然科学研究，21，33-46。
- 石田啓祐，中尾賢一，香西武2009，徳島県産国会議事堂大理石の研究—その3。衆参両院における石材使用の比較—。徳島大学自然科学研究，23，31-45。
- 石田啓祐，2010，Column 10 国会議事堂の大理石：文化財の“発掘”—徳島県産大理石を例に—。p.79。一般社団法人日本応用地質学会中四国支部（編）：中四国地方の応用地質学。高浜印刷，264p。
- 石田啓祐，橋本寿夫，元山茂樹，阿部肇，中尾賢一，辻野泰之，小澤大成，2011，つるぎ町一字の「ろう石」—国会議事堂関連石材の調査報告—。阿波学会紀要，No.57，197-202。
- 石田啓祐，2013，太龍寺建造物の石材使用—礎石の大理石と珪石—。112-135，早淵隆人（編），舎心山常住院太龍寺 四国八十八箇所霊場 第21番札所「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書3。徳島県教育委員会，徳島，205p。
- 大蔵省営繕管財局，1936，帝国議会議事堂建築の概要。東京，57p。
- 大蔵省営繕管財局，1938，帝国議会議事堂報告書。東京，411p。
- 大阪市教育委員会（編著），2003，重要文化財大阪市中央公会堂 保存・再生工事報告書。大阪市・株式会社新建築社，大阪，505p。
- 工藤晃，大森昌衛，牛来正夫，中井均，1999，新版議事堂の石。新日本出版社，158p。
- 小山一郎，1931，日本産石材精義。龍吟社，東京，298p。
- 東京国立博物館（監），1991，こんなに面白い東京国立博物館。新潮社，143p。
- 博物館建築研究会（編），2007，昭和初期の博物館建築：東京博物館と東京帝室博物館。東海大学出版会，194p。
- 中尾賢一，2014，阿波学会60周年記念誌，阿波学会，徳島県立図書館，p.8，9。
- 臨時議院建築局（編），1921，本邦産建築石材。三菱鉱業，東京，211p。

Marbles from Anan City decorating the historically important buildings in Japan

ISHIDA Keisuke*, HAYABUCHI Takahito, NAKAO Ken-ichi, SHINOAKI Shozo.

* 1-1 Minamijosanjima, Tokushima, 770-8502 JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.60 (2015), pp.195-198.